

古墳時代後期群集墳論

志賀郡北部の階層性

丸山 竜平

A Discussion of the Burial Mounds of the Late Kofun Period

- North Shiga County's Social Hierarchy -

Ryuhei MARUYAMA

はじめに

ここで取り上げる群集墳は、古墳時代後期後半のものである。それは5世紀末から6世紀前半期にかけて、後期群集墳と酷似した形態で群集するプレ群集墳ではなく、6世紀後半期から7世紀前半期にかけての1世紀間に展開した古墳群の密集形態をさすものである。

しかもその広がり、**「津々浦々」**にまで、といわれるように、草深い山中の盆地や海上の孤島にまでさえ、築造されていく。

とはいえ、何処にでも同じような密度で見出し得るかといえば、それは決してそうではない。濃密な分布地域もあれば、極めて散漫で稀薄な分布を示す地域もある。地理的、地質的特質、あるいは歴史的な環境にも左右され、耕地面積の広狭や河川による水運の便など、地域間での発達の不均等もそのような較差の要因であろうが、それにしてもなお、同一環境の地域においていずれもが均一な古墳文化の発達を約束していたかといえばそうではない。

類似環境下においても古墳の形成や群集規模においては種類の差異が認められるのである。そのような異同に至らしめた要因がどのようなものであったのか、どこからその差異が生まれできたのか、これらの課題はいずれも解明しなければならない問題点であるが、いまひとつ不透明な部分が多い。また、群形成の相違に先立って、あらかじめ明らかにしておかなければ点として、はたしてどのような群構成で、それぞれの異同が顕在なのか、群集形態上での具体的様相から問題の本質を解き解していく必要がある。

ここでは志賀郡北部でも比良山麓にあたる志賀町内の群集墳を問題視したい。この地域の具体相を追及することは、これまでにすでに、同じ志賀郡でも大津の北部を占める堅田周辺に関して論を展開したことがあり⁽¹⁾、また、その中心的位置を占める春日山古墳群についても論じたことがある⁽²⁾。さらにまた、大津市北郊の後期古墳として明らかにした群集墳もある⁽³⁾。このような湖西の群集墳の様相の中から、あらためて比良山麓の群集墳を基底に据え、ひいては真野川流域から和邇川流域にいたる古来和邇と呼ばれたであろう地域について、より研究の深化、発展を試み、平面的考察から立体的な考察へと論を広げたい。

狭大な志賀町は南北およそ16kmあり、東は琵琶湖の湖岸が迫る。山麓から汀線までの幅はおよそ1~0.5kmに過ぎず、この猫の額ほどの小さな平地を抱えた比良山麓では明らかに農業生産力の最も低い地域に属するといつてよい。この点が、分析上大きな意味を持つとすれば、それは他地域とは異なって、比較検討に際しての複雑な諸要素・諸条件が極めて少なく、単調

にして単純な、群集墳築造の経緯を明確にする利点があるのではないかとの見方である。なお、志賀町の後期群集墳についての概観はかつて試みたことがある⁽⁴⁾。ゆえにここではその本質部分に関して論じることにはしない。

1 後期群集墳の動態 プレ群集墳段階と後期群集墳一

志賀町内にはプレ群集墳 5世紀末葉～6世紀前葉にかけて築造された群集形態をとる古墳群)は1例もない。これを地域的に拡大し、大津市内を視野に入れてもプレ群集墳の形成は無い。つまり、志賀郡では、5世紀末葉から6世紀前葉にかけての時期に群在して築造された小規模墳を見出すことが出来ない。ところが、これが同じ湖西でも高島郡を含めれば幾つかのプレ群集墳を指摘し得るのであって、この点で南北両者間での地域相、歴史的経緯が随分と異なっていたことになる。その代表的なプレ群集墳とは今津町甲山古墳群や安曇川町田中古墳群を筆頭に上げることが出来る。

たしかに志賀郡内ではプレ群集墳の築造はなかったが、とはいえ、北部を占める志賀町内では大津市域とはまた異なり、プレ群集墳築成の契機が確かに潜んでいたかに思われる。その1例は小野の道風神社境内に築造された3基からなる古墳群である。この道風神社古墳群は小野字村ノ内に所在し、滋賀丘陵を幾つにも刻む大小河川のなかでも和邇川と呼ばれる真野川に次いで大きい河川の右岸域にあたり、この丘陵の先端部を占める比高差およそ30mの勝地にある。

墳丘の著しい2基の古墳のうち1号墳は、墳丘の径28m、高さ4mの円墳である。墳丘頂部は裁頭円錐形で、その平坦部の径は10～12、3mと南北に長い不正円形である。その年代は、墳丘形態の特徴から5世紀代に遡ると言ってもよい。他方、その南に近接して築造された2号墳は、墳丘径が17m、その高さ2mの円墳である。しかし、古墳の立地する尾根筋が南にはみだした格好で前方部状の地形を残している。その前方部様地形は幅8m、長さ17mで高さ1、0～2、9mある。円墳部分は頂部が裁頭円錐形とはならず低い土饅頭型であり、年代は5世紀に遡るものではないが、6世紀初めと見てよい。

このようにここに後期群集墳に先立って築造された5世紀末葉から6世紀初めにかけての古墳群の形成を見ることが出来る。しかし、この3基は一時期に築造されたものではなく、三世代を重ねたもので、有力家族の三世代にわたる系譜墓とみてよい。しかし問題は、それが後期群集墳へと同じ墓域内で系譜的に継承されず、むしろ次世代の古墳群は小さな谷を北に隔てた石神古墳群へと移行することである。改めてこの新地で家族の墓域を形成し後期群集墳を営むのである。そのみか、次に述べる曼陀羅山北古墳群中の5世紀末葉に遡る古墳群もこの道風神社古墳群と別に群を形成する点に注意される。つまり、後期群集墳に先行する古墳群が、プレ群集墳を形成せず個別、分散的に存在することである。一般的にプレ群集墳は、地縁的も少々かけ離れた小古墳群を1墓域に束ねて1群をもって形成する点に特質があり、世代同士での群形成を、結果的には2～3世代重ねて1群を形成することになったものである。とすれば、曼陀羅山北古墳群は道風神社古墳群と1群を形成しなければならなかったのであるが、実際はその背後におよそ900m隔てて存在することになった。

この曼陀羅山北古墳群は小野字大塚に所在し、曼陀羅山の最先端の尾根上一頂部に築造されたものである。標高およそ182.5mを測り、平地から100m弱からの眺望は極めてよい。眼下に和邇川河口や平野部、琵琶湖湖面はもとより対岸湖東を望むことができる。古墳群は全長およそ80mの尾根筋高まりに、琵琶湖側の平坦地を避け、西側の傾斜地にかかるような位置で築造される。つまり曼陀羅山の西側の谷筋に面し、琵琶湖側ではなく真野側を意識して築かれたも

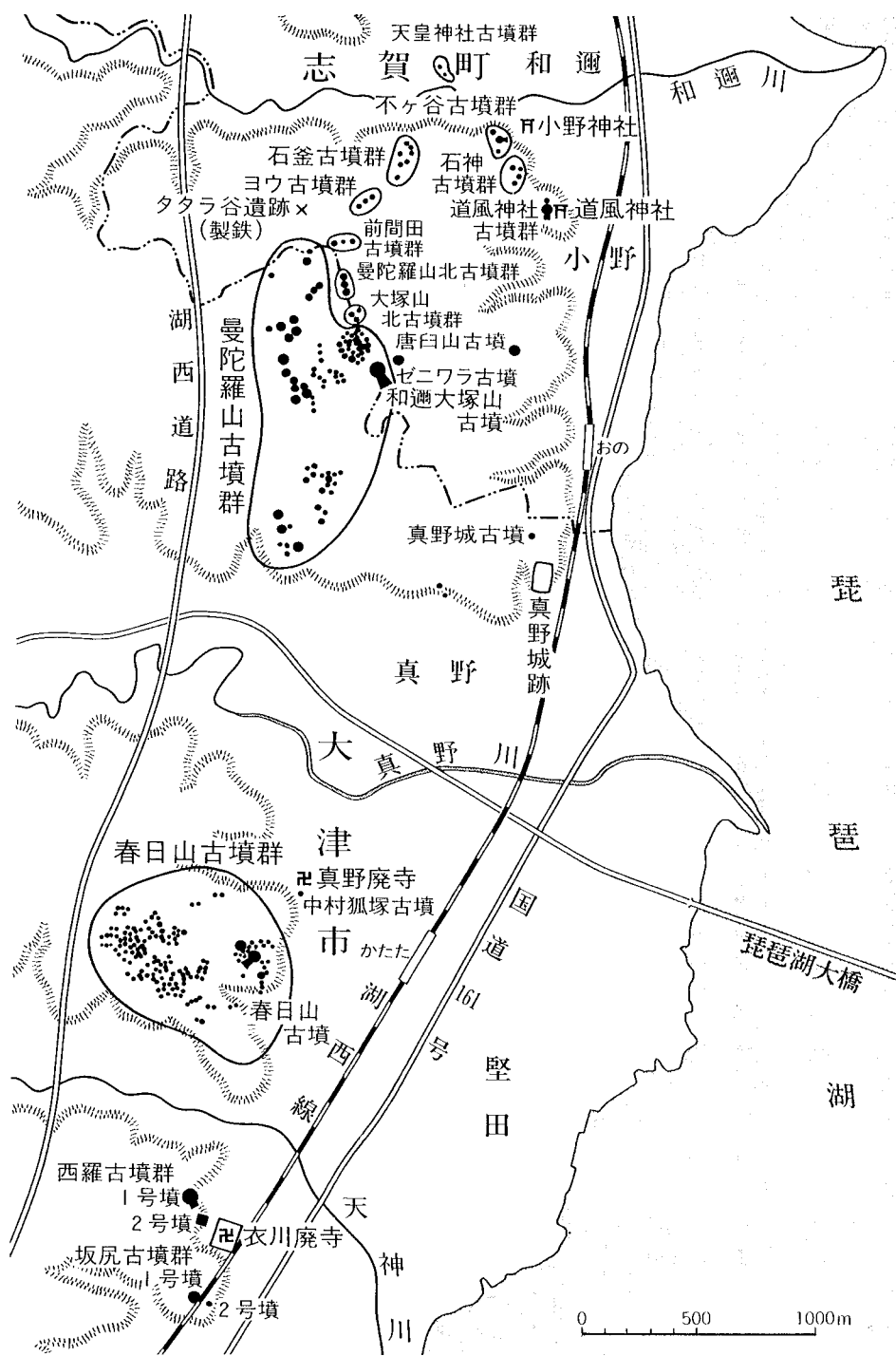


図1 小野・真野・堅田地域の古墳群

のである。また、このことは一群のなかに築造された後期群集墳の横穴式石室の羨門が西に向いていることとも関係付け得る。

曼陀羅山北古墳群中の1号墳は直径10m、高さ50cmの円墳である。道風神社古墳に比して規模の小さなことが分る。しかし、丘陵頂部に築き、内部主体は不明である。また、2号墳はおなじく丘陵頂部に位置し、直径16m、高さ1mあり、墳頂部は平坦面をつくる。主体部は木棺直葬かと推定され、年代も5世紀に遡ることが分る。さらにまた、3号墳は径18m、高さ1.5mの円墳である。内部主体の構造は不明である。おそらく木棺直葬であろう。横穴式石室を内部主体としないこれら3基はおそらく道風神社古墳群と同様に5世紀末から6世紀初めに築造された古墳群とみてよからう。

しかし、ここでは先の道風神社古墳群とは異なり、さらに4号墳が同じく丘陵頂部に築かれ、径20m、高さ5mの円墳として存在する。内部主体は横穴式石室である。さらにもう一基の5号墳は、直径15mの円墳で主体部はやはり横穴式石室である。

さきに後の課題とした問題は、後期群集墳に先立つ古墳群が、ここでは一系譜墓として認められ、一般的なプレ群集墳とされるものに特有の複数の有力家族の墓域の形成、しかも系譜的に、それぞれの家族が別支群を形成するものではなく、支群の形成があるとすれば、支群は同一世代によって形成されるものである、といった様相はみせない。つまり、ここではプレ群集墳を形成せず、それぞれが個別に古墳群を形成したことである。それは有力家族の系譜墓としてのみ位置づけるものであった。ここに和邇、真野両河川域では北の高島郡とはまた異なり、通常のプレ群集墳を発達させることのない、そのような結合関係を欠如していた訳である。相対的ではあるが、墓域を他家族とは混在させない、さらにいえば、複数の家族が全体で墓域を占有し、かつ、古墳を世代ごとに結合させ、あるいは集中させることがなかったわけである。そのような様相こそ志賀町内の実態であったといつてよい。そして、次期にはたちまちのうちに後期群集墳が盛行する。つまり、プレ群集墳段階を経ることの無い比良山麓域であったといつてよい。次章でその実態からみておきたい。

2 群集墳の諸形態 支群と立地

比良山麓には、高島町内に属する白髭古墳群や鷓川古墳群を除くと、志賀町内の北から北小松古墳群12基、南船路古墳群7基、天皇神社古墳群3基、石神古墳群4基、石釜古墳群7基、ヨウ古墳群3基、前間田古墳群3基、曼陀羅山北古墳群2基、大塚山北古墳群3基、曼陀羅山東古墳群(ゼニワラ古墳、唐臼山古墳、真野城古墳<これのみ大津市域>)がある(不ヶ谷古墳群、道風神社古墳群、小野神社境内の古墳、曼陀羅山古墳群中和邇大塚古墳については後期群集墳ではないのでここでは除く)。いま、これらの古墳群の特質を見れば次の点が明らかとなる。

- 1、いずれも後期群集墳であるが、内部主体は、唐臼山古墳1例が異なる(横口式石郭)のみで、他はすべて横穴式石室である。
 - 2、年代的には、未調査で不明なものも当然あるが、おそらく6世紀後半から7世紀前半のものが大半である。
 - 3、墳形は、わかる範囲では、すべて円墳もしくは円形墳である。前方後円墳などはない。
 - 4、墳丘規模は特に目立つものではなく、いずれも径20~8m前後である。
- A、つまりここでは、分析対象となる後期古墳が、いずれも極めて均一的(小規模といった意味での墳丘規模、石室規模)で、かつ均質的(墳丘形態、主体部・石室構造、副葬品 資料が

少なく明確に出来ないが、)であることが特記される。これまでの前期、中期古墳が上記の点と相反したものであっただけにこれらの点は著しい特徴として映る。

B、とはいえ、注意すべき点がある。

- a、群構成は均一ではなく、その基数の多少が目につく。例えば、ゼニワラ古墳や唐臼山古墳は単独墳といってよく、1基のみからなる。これに比して北小松古墳群では12基あり、南船路や石釜古墳群では基数も7基と多い。小論では触れない曼陀羅山古墳群では総計86基からなり、さらに南に真野川を隔てて所在する春日山古墳群では後期古墳が134基あって、膨大な群集墳を形成する。ここでは12基前後までの少数範囲ではあるが、それでも1基、3～4基、7基、12基といった不均一さが指摘し得る。
- b、墳丘規模も均一と言え言えるが相対的であって、子細に注意すれば、微細な立地の相違と関連し、大小の規模があり、空溝の有無などとも関連する。この点は併せて、石室の規模の大小などとも関係をもつといってよい。

つまり、「群小古墳」といった意味で、均等的ではあるが、その背後に異質さ、不均等さを垣間窺い得るのである。それがまた、後期群集墳の特質となって、問題の所在を明確化しているといってよい。

ではこの基数の差異はどこからくるのであろうか。ここでは群形成の基本単位をいかに考えるかが問題となる。この点に関してはかつて論評を交えて論じたことがある⁽⁵⁾のでそれに譲り、確認だけしておきたい。つまり、群集墳とは古墳時代の最後の段階である後期に、一有力家族が3～4世代にわたって、それゆえ3～4基の古墳を世代を重ねて築造したものである。この前提がここ志賀町でも想定可能なことは、例えば石神古墳群の実態を見ればおおよそこのことが妥当であるとわかつく。

やや詳しく言えば、石神古墳群は、和邇川の右岸に位置し、小野神社と道風神社に挟まれた丘陵先端付近の標高およそ104～110m付近に築造された4基からなる古墳群である。1号墳と2号墳は墳丘の裾を接しているが、3号墳は最も近い1号墳とは南南東へおよそ40m隔たる。また真南に近い方向にあって最も離れて位置する4号墳とはおよそ67mの距離がある。このことからこの古墳群がおよそ90×40mの範囲を墓域とすることが分る。

これら4基の古墳は石室構造や出土遺物などからみて、4号墳 3号墳 2号墳 1号墳と世代を追って継起的に築造された一有力古代家族の墓とみてよからう。そしてこのような1群を基本単位として群集墳をみるならば、それはこの基本単位を1支群として、複数の支群が集合して群をつくることが分る。

以上のような後期群集墳の築造論理を前提にするならば、群基数の基本単位が3～4基であったことが分る。しかし、実際には築造開始が遅れた家族やこの有力家族の勢力に変動が生じ、古墳時代の終焉を待たずに築造を断念した家族がなかったとは言えず、そこでは1～3基程度で支群を形成したことになる。

ならば、志賀町内の後期古墳群は、ゼニワラ、唐臼山の各単独墳を除けば(除外の理由は後述) 天皇神社古墳群、先に詳述した石神古墳群、ヨウ古墳群、前間田古墳群、曼陀羅山北古墳群、大塚山北古墳群がそれぞれ3基(現況で2基しか知れないものに曼陀羅山北古墳群があるが、これを加える)から構成されていて、最も多い6群となる。後述のようにゼニワラと唐臼山、真野城の3古墳が3世代を重ねる一系譜となれば、7群を数えることになる。他は12基からなる北小松古墳群1群、5～7基からなる南船路、石釜、の3古墳群である。

このような基数の多い群集墳を、さきの定式に当てはめれば、12基の北小松古墳群は5支群、

5家族によって構成され、うち、後期の100年間に変動無く古墳を築造出来たのは3家族であった。他の2家族は変則的であったことになる。それがまた、後述のように立地にも反映しているともてよからう。

先の7つの群は1家族からなる古墳群でその独立独自の、自営的、ひいてはリーダー的存在が偲ばれる(リーダーといっても種種の段階があり後述する)。また、先述の2つの群は5~7基であるから、2家族からなる群であって、両家族の結合関係はなお血縁的にも、経営的にも強い絆があったに違いない。

これが春日山古墳群のような幾十の家族が結合的に墓域を形成した場合、その背後には、血縁的にもさることながら、地縁的、さらには擬制的関係においても結合関係を保持するものであり、生業や経営をも反映していたに違いない。

ここで特記しなければならない問題は、先に示した単独墳が、実は単独ではなく、単に墓域を広大に占地し、それぞれが悠然と世代を替えて古墳の築造を行っていたことの結果、一見単独墳と見まがう景観を呈したことである。この曼陀羅山東古墳群に関しては章を改めて論じたい。

つまり、3~4基、5~7基、12基がしめす3段階の基数値は、有力家族の家族間の結合関係を反映しており、墓域を共有関係においていると表現してよい。家族間の関係はさらに支群構成を立地や規模、副葬品などから分析することによってより実態が鮮明とならう。そこには単なる均等で対等な結合関係などなく、家族間の優劣加減が反映しているといえる。

たとえば、基数の最も多い北小松古墳群からこの点をみておこう。

北小松古墳群は、比良山系でも琵琶湖にむかってのびる幾つもの尾根筋のうち、北から数えて2つ目となる尾根筋先端(低位)位置する。山塊の南東部先端近くを主に分布するといつてよい。さらに詳しく言えば、A支群はこの山塊が南北2つの尾根からなる、その南側の尾根筋先端下降地に位置し、前面まじかに見下ろすように琵琶湖を望む。この古墳群のなかで最も琵琶湖に近い。これに対して、B支群はこの丘陵の先端部でも南西斜面に位置する。A支群とは、例えば最も至近の古墳間でいえば、A-2号墳とB-6号墳とは、その間およそ85メートル隔たる。この数値は大きい。

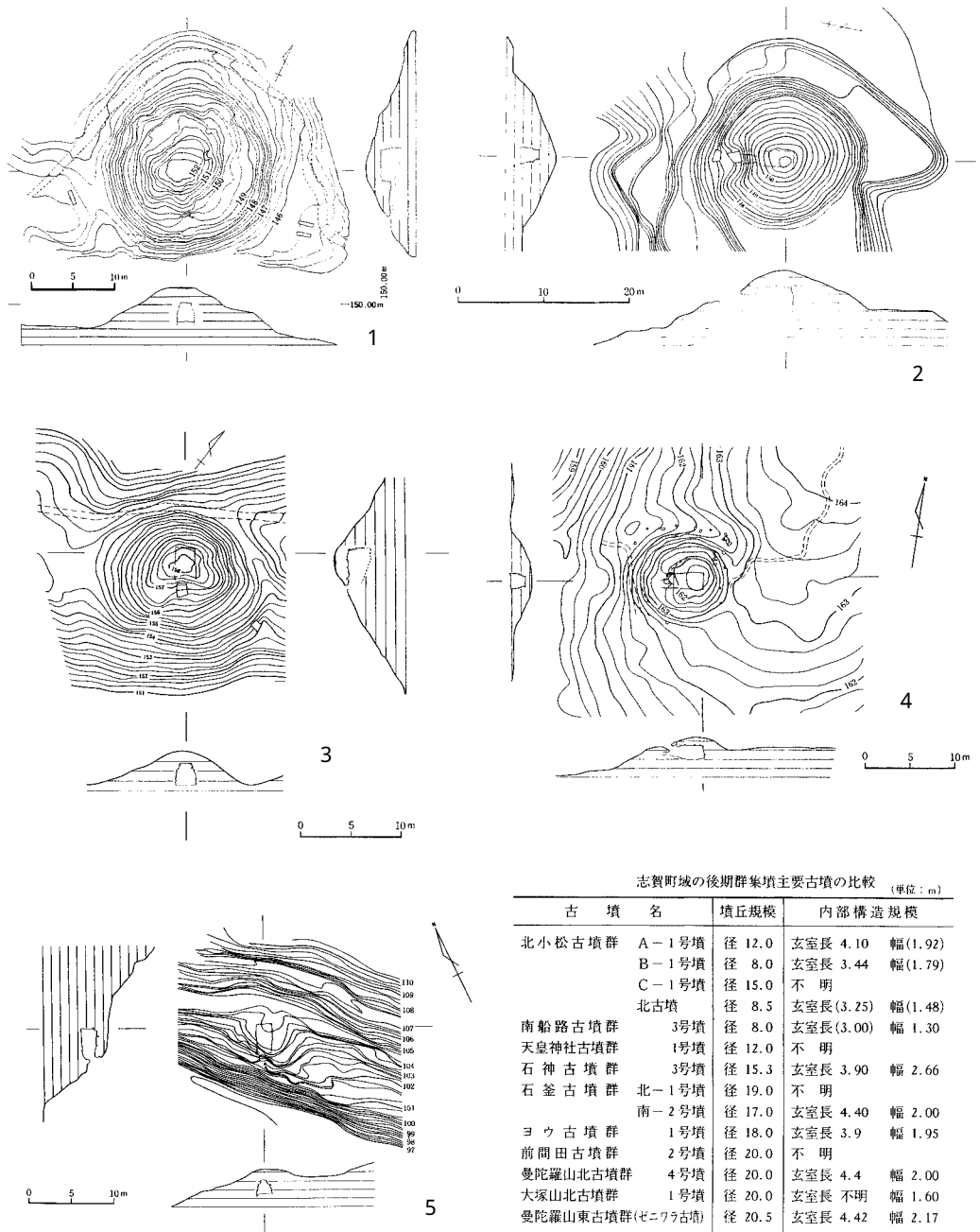
さらにC支群はさきのA支群と同じ尾根筋上でありながらその北端近くに築かれる。A支群との距離はおよそ250メートルある。さらに北支群はA支群からC支群を結ぶ尾根筋とは東側に小さな谷を挟んで東尾根筋の西斜面に築かれる。その間の距離はおよそ325メートルある。

このように、計12基からなる古墳群とはいえ、都合4支群から構成された古墳群であって、各支群を構成する基数は、それぞれ4基、6基、1基、1基となる。1基しかないC支群や北支群ではなお古墳が埋没している可能性もある。また、6基からなる支群はさらに細分可能で、実際は2支群からなり、実態は5家族5支群からなるものであった。

そして、各家族が、つまり各支群がどのように構成されていたかは、さらに古墳の立地を詳細に観察することによって明瞭にすることができる。この3基が25~35m間隔でまとまることが分る。また、つぎに述べるB支群とは密集度が異なり、ゆったりと支群を形成していることが分る。

他方、B支群は、B-5、同6号両墳がやや上位にあり、これに比してB-1~4号墳はほぼ同一のレベルで下位に占地している。しかも墓域は傾斜地に極めて限定されている。このようにA支群は相当にゆったり占地していたことがわかるし、B支群との階層的差異を明確に表徴していると言ってよからう。

古墳時代後期群集墳論



志賀町域の後期群集墳主要古墳の比較 (単位: m)

古墳名	墳丘規模	内部構造規模
北小松古墳群	A-1号墳	径 12.0 玄室長 4.10 幅(1.92)
	B-1号墳	径 8.0 玄室長 3.44 幅(1.79)
	C-1号墳	径 15.0 不明
	北古墳	径 8.5 玄室長(3.25) 幅(1.48)
南船路古墳群	3号墳	径 8.0 玄室長(3.00) 幅 1.30
天皇神社古墳群	1号墳	径 12.0 不明
石神古墳群	3号墳	径 15.3 玄室長 3.90 幅 2.66
石釜古墳群	北-1号墳	径 19.0 不明
	南-2号墳	径 17.0 玄室長 4.40 幅 2.00
ヨウ古墳群	1号墳	径 18.0 玄室長 3.9 幅 1.95
前間田古墳群	2号墳	径 20.0 不明
曼陀羅山北古墳群	4号墳	径 20.0 玄室長 4.4 幅 2.00
大塚山北古墳群	1号墳	径 20.0 玄室長 不明 幅 1.60
曼陀羅山東古墳群(ゼニワラ古墳)		径 20.5 玄室長 4.42 幅 2.17

1.ゼニワラ古墳 2.ヨウ1号墳 3.石釜南-2号墳 4.北小松A-1号墳 5.北小松B-1号墳(1 5は立地と墳丘規模、形態に階層性を表徴)

図2 後期古墳の階層性

以上のように群集墳の数は、墓制に現れた有力古代家族の数(ただし、この数は古墳の数の3~4分の1となるが)とその100年間の家族史、わけても家長の交代史を表す。しかし、群集墳はそれのみではない。微細な立地関係、あるいは占地関係、ひいては墳丘規模、石室規模を微細に反映した家族間の身分関係を反映するものではなからうか。そこには権力者側に足場をおこうとする有力家族の激しい階層関係を見抜き、この時代を立体的に把握する根拠を得ることができると考える。

3 立地と墓域の格差

すでに第2章で、北小松古墳群を論じた際、家族間での微妙な立地と分布の差異の分析をおこなった。a、ゆったりとした占地と琵琶湖を広く見渡す、景勝の墓域で、尾根筋の延長線上に乗っかる支群。古墳の墳丘も総じて明確で、高まりも認め得る。空溝もまた痕跡を留め、墳域を確かなものとする。これに対して、b、集落方向へ石室を開口させ、山麓裾部の急傾斜地に位置する墓域支群。墓域も狭く、墳丘も高いといった印象は薄い。そして、c、視界の悪い山塊の谷筋に面して1基から構成された支群。これら三者にはそれぞれあまりにも大きな差異が横たわる。それがそのまま三者の力関係を表し、身分的表示としての古墳の役割を遺憾無く発揮しているとみてよからう。厳しい三者の関係ではあるが、それでもこの山塊に墓域を定め得た家族は有力家族の家父長を反映するものとしてよからう。北小松古墳群のそれが、地縁的にも血縁的にも結合する古代家族間のものであって、然りとすれば、共同体的関係の定かでない、あるいは薄いであろう古代家族間ではどのような墓制への反映を期待できるであろうか。

和邇川右岸には多数の古墳群が群在する。既に述べた古墳群中、北小松と南船路と天皇神社のそれが左岸であるから、これを除けば実に7つもの後期群集墳がひしめき合っていることになる。曼陀羅山古墳群(京阪ニュータウン)を併せれば、和邇川右岸から真野川左岸までの間、山尾根筋のめばしい高まりではほぼ隙間なく墓域が設定されていたとみてよからう。そして、そのような群在のなかでの微細な関係は如何なものであろうか。そこに群集墳墓制なかんずく階層性ひいては身分制をは読み取ることが可能ではなからうか。

和邇川右岸でのもっとも近接した丘陵尾根筋の高まりと言えば石釜古墳群が占地する。その最高地点は150.75mを測り、さきに一有力古代家族として分析した石神古墳群の背後の尾根筋にあたる。両者の距離はおおよそ750mあり、石神古墳群の標高は110mにあって、石釜古墳群よりも40mも下位に位置したことが分かる。おなじく石釜古墳群の南に近接するヨウ古墳群は標高148mを示し、さらに南に続く前間田古墳群は標高159.5mである。

これら志賀丘陵に築造された古墳群を立地で見ると、ヨウ、石釜、前間田の各古墳群は、おそらく石神古墳群の家父長とは地縁的な関係にあるものの、後者が琵琶湖に面し、西近江路に沿う丘陵先端部の勝地に占地したのに比して、前者3古墳群は確かに立地は高いが、奥地であり、平野との距離は大きい。みずからの力を誇示するには的確ではない。

他方、曼陀羅山の位置する真野川に近いその左岸では、琵琶湖側には単独墳としてより占地の大きな一大墓域とみなしてよいゼニワラ、唐白山、真野城の3古墳3代にまたがるものがある。その立地は背後の曼陀羅山の曼陀羅山北古墳群が182.5mの高所にあり、また、同様に高所にある大塚山北古墳群が174mを示したのに比して、曼陀羅山東古墳群は遙かに低く標高149m(ゼニワラ古墳)であった。

つまり、確かに一古墳群中では、特に支群間ではその立地は高所が優位者を表示するものであったとみてよい。北小松古墳群ではそのことが顕著であった。しかし、古墳群間でみた場合

にはその高低は問題ではなく、むしろ古墳間の距離、つまり家族が把持した墓域の広がり(面積)が重要な意味をもったようである。もちろん、これに墳丘形態や規模、石室構造や規模、副葬品などの質、量が関わりをもつのである。先に見たように、和邇川右岸での階層関係は石神古墳群を最優位に置くものであり、このことは墳丘規模や石室の規模、あるいは石棺の有無からも首肯させるものであった。

しかし、転じて単独墳を単なる単独墳と解せず、これを首長墓の一形態として、再び古墳間の距離に注視するならば、石神古墳群の位相に変化が生じる。

つまり、ゼニワラ古墳、唐臼山古墳そして真野城古墳を包括するものとして曼陀羅山東古墳群を設定すれば様相が変わる。ゼニワラ古墳と唐臼山古墳間の距離は500mあり、唐臼山古墳と真野城古墳との間は760mある。墓域はおよそ45haとなる。これに比して次いで墓域が大きい石神古墳群では先に触れたように3600m²であった。あわせて他と比較すれば、大塚山北古墳群が240m²あり、前間田古墳群で360m²であった。各家族墓間でこのような数値差のあることが判明する。

これを古墳の規模や石室の規模で通観すれば、北小松古墳群では最大値が径15m前後である。また、南船路古墳群では径6～7mと一層小規模である。同じく天皇神社古墳では径12mであった。和邇川の左岸域ではいずれもが径15mを越えない小規模なものである点に注意してよからう。

これに比して和邇川右岸域では、石神古墳群が墳丘の崩壊が著しく正確な規模は出し難いが、墳高では4.3mある。元来はもう少し高い。和邇川左岸域での最高は北小松古墳群中での墳高4.0mである。石釜古墳群では最大径20m、墳高の最高で3.0mが知れる。また、ヨウ古墳群では径18m、高さ5mが最大値である。これに比して曼陀羅山北古墳群での最高は径20m、高さ5mである。大塚山北古墳群もまた最高径は20mであった。これらに比してゼニワラ古墳では、径20.5m、高さ5mであった。この数値から判断されるように、径20.5mはけして突出した規模ではない。むしろ近似値は周縁に多いといつてよい。高さにおいても同様なことが指摘し得る。

ならば、先に指摘した墓域の規模こそが、その立地と共に階層性を明確に反映しているといつてよからう。特に尾根筋上で、かつ眺望が利くものを最高点として、あわせて広域の墓域を占有するものであろう。

4 むすびにかえて

志賀町内の後期群集墳をその分布調査の成果から探ってきた。そこには多様な群集形態の実態が明らかとなった。古墳の立地や分布形態、規模などに、微妙なそれでいて厳しい差異が、あたかも厳格な階層性をものがたるかのように営まれていた。そこにどのような制度化されたものが存在するのかはまだまだ疑問である。しかし、この多様さの中に、古墳と古墳群がいがやが上にも反映せざるを得なかった、共同体的諸関係わけでも血縁的、地縁的、あるいは擬制的諸関係が潜んでいるに違いない。また、家父長制的古代家族つまり古代家父長制的世帯共同体(郷土的家族)やその内部を構成する単婚家族(房戸の家族)、さらには族長、政治的地域首長などの諸概念と古墳群との関係が問題視されることにならう。

そのような意味で、古墳群が共同体的結合関係を微細なまでに反映しているとみるのは読みすぎであろうか。

A) 北小松型古墳群、と名づけるに相応しいものである。尾根筋上での斜面に広く墓域をも

つ支群と急傾斜面での墓域、さらには一見無縁かと思われる距離の下でおよそ古墳立地に相応しくない支群を含むといった三種の立地相を包括する古墳群。そこには家父長制的古代家族が複数で、地縁的また血縁的諸関係の元で、厳密な階層性を顕示しつつ墓域を発展させてきたものである。ここでも支群は家父長制的古代家族とし、郷戸的家族墓とみたい。支群を房戸的家族墓とすることに躊躇するのである。もし支群を房戸的家族とみるならば、A支群は家父長(郷戸主的存在)を抱く房戸的家族墓であり、B支群はA支群と血縁関係にある2つの房戸的家族墓となろう。C、D支群はそれに加えて新興の古代家族墓つまり家父長を頂く房戸的家族墓が2つ背後にあることになる。しからずんば、各支群はそれぞれ有力家父長制的古代家族墓を反映したものと規定できよう。しかし、この概念規定がすべての支群もしくは群集墳の基本単位に相当するかどうかはなお検証の必要性を残す。

B) 南船路型古墳群、と呼称するに相応しい古墳群は、極めて限られたスペース内において2つ、あるいは3つの支群を包摂し古墳群を形成するものである。半ば自立しつつある古代家族ではあろうが、なお地縁的にも血縁的にも強固な関係を維持し、集落もしくは集落の有力者層を反映してのものとみられる。相対的な自立性は弱く、近隣の有力古代家族との関係をも持続維持する段階にある。ゆえにその立地は山麓斜面にあって、尾根筋上などに指向する段階ではない。

C) 石釜型古墳群、と呼びえるものである。さきのB型との比較においてより鮮明となる群である。つまり、その立地が尾根筋上に求め得るものである点である。支群は複数あり、南船路と異なるものではない。あるとすればその優位な立地だけである。支群間には地縁的にも血縁的にも強い結合関係にある(この点は南船路と大同小異である)が、他の有力家族に対等に渡り合える社会的地位をもつ。

D) ヨウ型古墳群、前間田、大塚北、曼陀羅山北の各古墳群をもこの概念に含み得る。支群をなすものではなく、群として纏りをもつもので、かつ尾根筋上、もしくはそれに相当する緩やかな見晴らしのよい尾根筋上の斜面に築かれたものである。群そのものが家父長制的古代家族墓(郷戸主的家族墓)である(房戸主的家族墓の可能性も捨て切れない。なぜなら有力族長になればなるほど房戸主的父長の力が増し、弱小の郷戸主的家父長を凌ぐ力があつたに違いない、と推察可能だからである)。

E) 石神型古墳群、その広い墓域と明確な墳丘、そして石棺の利用が特徴的である。

F) 曼陀羅山東型古墳群、一尾根上に団塊的に群を形成するのではなく、一尾根に一基単位で独立墳を築造し、世代を重ねることによって結果的に広域を墓域とする古墳群を形成する。他の古墳群との間に如何なる地縁関係も血縁的關係も示唆させない、極めて独立性の強いものである。(ただ、ここで疑問が生じるのは、これを最有力家父長制的古代家族の家父長を軸とする古墳とみるならば、この家父長は合わせて族長の可能性が強い。しからば、この家父長の郷戸主的存在に対して、この家族の房戸主的父長の家族墓はいかに存在したかである。あるいはそれが石神やヨウあるいは前間田の各古墳群ではなかったかの推察可能なことである。これに曼陀羅山北や大塚山北の各古墳群も加えるならば、5つの房戸的家族が曼陀羅山東古墳群を取り囲むように築造され、一大族長家族墓群を形成していたのではなかったかと考え得る。確かにヨウ以下の古墳群は3基を基調とし、独立的要素の強い家父長的家族墓の可能性が強い。しかし、房戸主的父長墓との相違は明確でないはずであり、またそうならば、石釜古墳群はこの族長墓域の構成員として加え得るのかどうかと言った問題へも発展する。ゆえにこの疑問は、群形成の有り様から迫るしかない。この問題はさらなる検討を要するのでここでは今後の課題

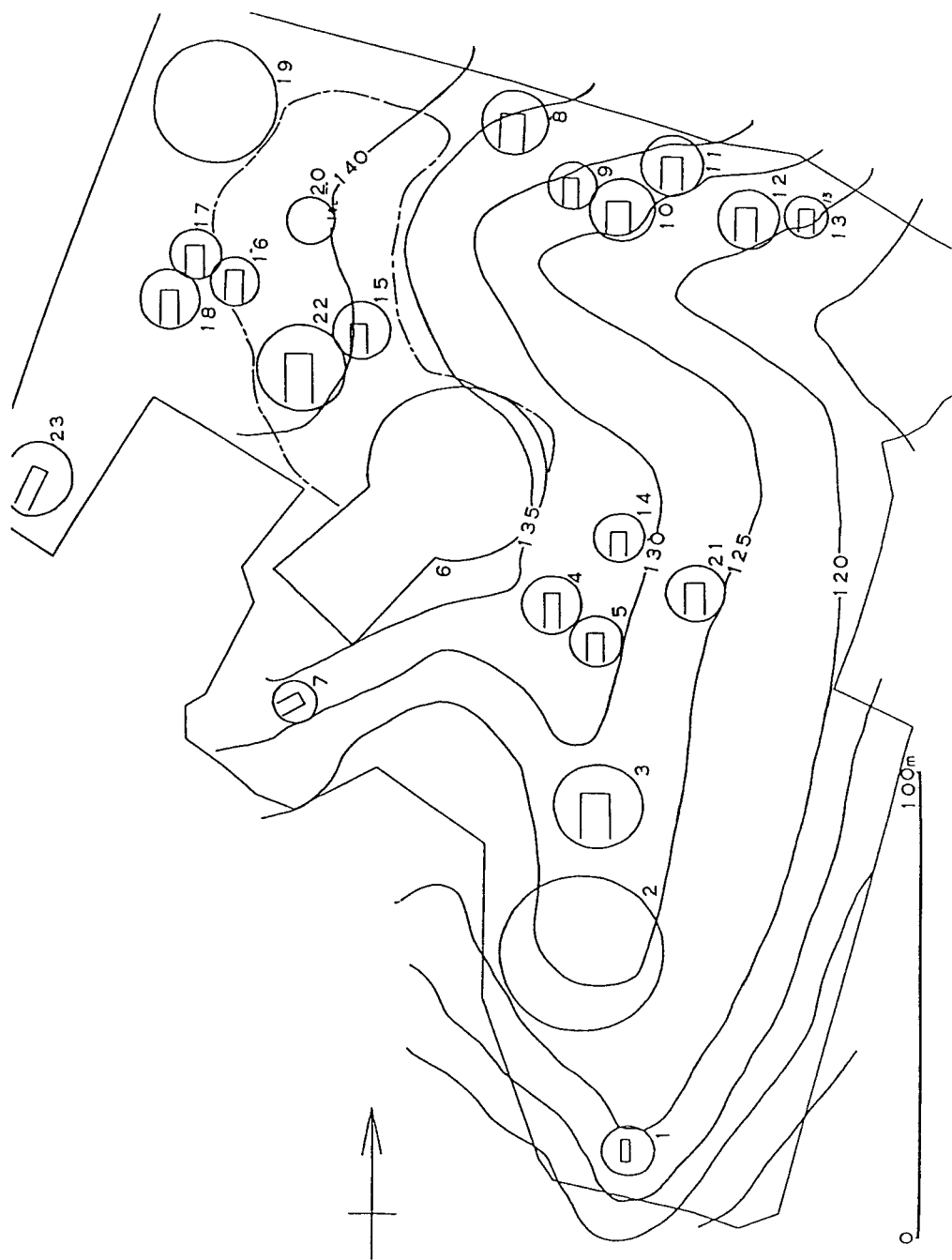


图3 春日山古墳群

にしたい)。

このようなA)~F)の6類型はそのまま家父長制的古代家族における共同体的結合関係の諸階梯を反映するものとみたい。

なお、最後に付言しておきたいことは、上記6類型がそのまま近江のあるいはわが国の後期群集墳のすべての類型を補い示すものではなからうといった点である。たとえば、志賀町に近接した、真野川を挟んで右岸に築造された春日山古墳群では、古墳時代中期の首長墓を含む系譜墓が総計23基築造されE支群を形成している。後期群集墳としては総計18基あり、支群は3基からなるもの3支群、2基からなるもの3支群、1基からのもの3支群であった。ならば、首長系譜墓1支群(3基)を除くと、他の8支群は族長家族を支えた房戸主的父長家族墓であったことになる。とすれば、この房戸主的父長の古墳築造の契機は必ずしも当初からではなく、暫時的で、遅滞的であったことがわかる。そして志賀町の曼陀羅山東古墳群やその周辺の古墳群と比較するならば、E支群構成の各支群が石神やヨウあるいは大塚北の各古墳群と対応する可能性があるわけである。いまこれら両地域を比較するならば、曼陀羅山東古墳群はE支群の系譜墓群とはその分布域の規模についてあまりにも相違する。支群間の距離にしてもそうである。E支群をさきのA)~F)の諸類型に相当させるとすれば、C)とD)の間におくことが出来よう。C)の石釜古墳群と同じ立地をとるが、支群間の距離が春日山E支群ではより大きいことが指摘出来るからである。

以上によって論究を終えるが、再度総論すれば次のようになろう。

- 1、近江国志賀郡志賀町での比良山麓の後期群集墳は、それぞれが立地や規模、分布の形態において微細な違いをもち、その差異はそのまま原始共同体崩壊後の共同体的諸関係の弛緩程度を示す。
- 2、家父長制的古代家族墓でも郷戸主的家父長家族墓と房戸主的家父長家族墓が予想されるが、通常3基前後からなる古墳群や支群はこの家父長制的古代家族墓とみてよからう。
- 3、広域な墓域をもつ古墳群が認定可能とすれば、それは族長墓であり、各古墳は族長家族・郷戸主的家父長墓であったことになる。ならばその周辺の有力古墳群はこの族長家族の房戸主的家父長家族墓となる。しかし、その古墳群を独立した古墳群とするか族長墓の支群とみるかは、その識別が困難であり、今後の研究課題となるであろう。

註

- 1、丸山竜平ほか『衣川 - 地域史研究1 - 』同朋社 1976年
- 2、丸山竜平「近江和邇氏の考古学的研究」『日本史論叢』第4輯 日本史論叢会 1974年
- 3、野添古墳群他後期群集墳に関しては『滋賀県文化財調査報告4』1970年がある。
- 4、丸山竜平他「志賀町の古墳文化」『志賀町史 第一巻』(志賀町史編纂委員会編) 志賀町 1996年